

倒れてからでは遅い

のぞまる 日頃の健康管理

【事例三】静岡県伊東市の宅地造成工事現場で本村勢ら十二人のリーダーとして就労していた玉新田の畠山雅明さん(48歳)は二月四日の早朝、洗面中に胸出血で倒れ、意識不明のまま二時間後に不帰の人となりました。

正月帰郷後、初孫のお祝いなどを済ませ、同僚より一足遅く一月二十二日に元気で出発、それからわずか十日余りのうちに伝えられた突然の悲報は、病弱の父親永太郎さん始め家族を悲嘆のどん底に陥しれました。

妻のハナヨさんは「孫もでき、これからというときに...。せめてそばにいて看取ってやりたかった」とうち沈要を掲載してみます。

以下、一問一答式にその概要を掲載してみます。

仕事は楽、それなのに...

問 就労先ではどんなことをやっていたのですか。
答 宅地造成工事です。私たちが畠山さんと三人組でU字溝の埋設や運搬、メジ塗りなどをやっていました。

問 過労というものはありますか。
答 秋田班の十二人は賃金も作業内容も同一条件で、早出一時間、残業三〇分でした。仕事の内容は前述のとおりで家にいるよりずっと楽だと思えます。その上規則正しい生活でした。

問 お酒など飲み過ぎて翌日に支障の出るようなことはありますか。
答 そんなことはありません。極くまれですが十二人で一升

問 現場を見た人はいないのですか。
答 山形県から来ている人たちと朝のあいさつを交し、間もなく何も言わず後へ倒れかかったそうで、あわてて支え大声で異常をわたしたちに知らせてくれたのだそうです。

問 急救車か医師はすぐに来ましたか。
答 事務所ですぐ連絡をとりました。早朝のことでしたので医師がかけつけてくれるまで三十分近くかかったようです。その間、わたしたちがつき添っていました。最初から意識はありませんでした。

問 宿舎の設備などで畠山さんの倒れた原因と考えられることはありますか。
答 宿舎はプレハブながら良い方で、テレビ、洗たく機、入浴施設など行き届いており原因として考えられることは思い当たりません。

「頭がいたい」と...

問 畠山さんの日常で、身体の変調がわかりませんでしたか。
答 例えば頭が痛いとか...。よく頭が痛いと言っていました。血圧は常に高かったようです。私たちはよく休んで医者に行くようすすめましたが、ガンとして応じませんでした。医者が嫌いであった

ようで家から家庭常備薬など多量に持参していたようです。問 そのほかに何か...。

答 倒れる前々日に仕事の打ち合わせでいくらか酒を口にしました。ふだんはあまり飲みませんでした。しかし翌日(倒れる前日)は就労中に「もう酒は絶対飲まない」と何十回も繰り返しており今考えれば、このときかなり変調があったのでは...と思えます。

医者嫌い命とりに

問 畠山さんが倒れた最大の原因は何にあると思いますか。
答 畠山さんの医者嫌いにあるのでないでしょうか。自分の身体は自分で管理するほかありませんが、高血圧などは健康診断をうけ、適切な医師の治療をうけることが何より大切と感じさせられました。

問 最後に、こうした悲しい出来ごとを繰り返さないたい

め、何が一番必要と思えますか。
答 かけつけた医師が、畠山さんの容態を一目見るなり、「いかに医者といえども、こうなつてからでは遅すぎる。こうなる前にどうか医師にかかってください」と、懇願するように言ったのが身にしみます。

過労・無理、病気の根源

売薬よりも医師の診療を

【事例四】山崎の工藤俊雄さん(46歳)は茨城県の出かせぎ先で激しい腹痛を起し、健康保険の受診証を持っていかなかったことや病院に不便なことから売薬を飲んでみました。

しかしさっぱり快方せず一月末帰郷、本荘市の病院で診察をうけたところ過労が原因と見られる内臓疾患であることが判明現在毎日通院しています。

工藤さんは、正月前、山梨県の建設現場に就労しました。作業がきつすぎたため、正月後には茨城の工事現場へ移ったという、茨城での仕事は道路清掃(団地造成現場に入りするダンブカーが道路に落とす土砂の除去)で、極めて楽な仕事であったと語っています。

結局、正月前の過労が一月後に病気を起こしたことになる、本人は「過労の恐ろしさを始めて知った」と語っています。

これに似た例は昨年あたりでも数え上げればきりがありません。出かせぎからの帰郷後に発病、長期間病魔に苦しめられた人も多いといわれています。

工藤さんのように、一早く医師の診療をうけることが病気の悪化を防ぐ最良の方法であり賢明なことだと考えられます。

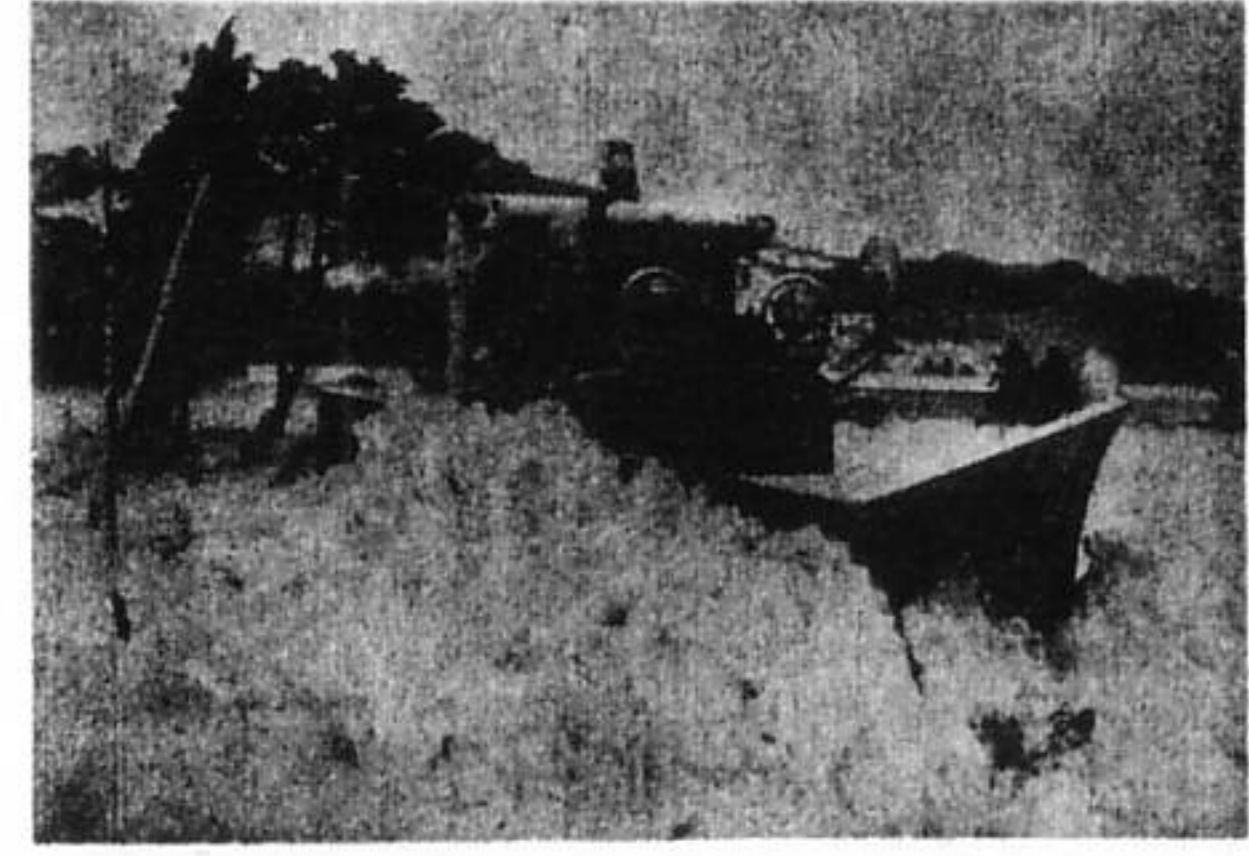
事例、いかそう

互助会必ず加入を 事故や病気が発生してからは遅すぎます。これまであげた幾つかの事例を、紋次郎よろしく「アッンにはかかわりのないこととごんす」と見すごす訳には行かないはずです。

出かせぎの悲劇を一掃するために、今一度、身体に変調はないか。無理をしてはいないか。睡眠不足など不健康状態に就労してはいないか。作業服・ヘルメットなど安全対策は十分か。など、初歩的なことではありますがじっくり反省してみてください。

そして、その結果を、心配している子供たちや留守家族に知らせ、安心させてほしいと思います。

事例にあげた人たちは全員出かせぎ互助会に加入してあり、工藤さんを除いてそれぞれ見舞金等を受給しています。未加入者はいまからでも加入しましょう。



やはり来た寒波

2年続きの暖冬も、ここ数日寒波に見舞われ冬將軍の横暴さを見せつけられています。

村有4台、県有1台の除雪車をフル運転、留守家族の生活に不便を与えないよう村道のすみずみまで除雪を行なっています。

時節がら一層のご自愛をお祈りいたします。

【写真】活躍中の除雪車

まさに非常事態

出かせぎ故

健康管理 一点に照準

安全就労 家族への連絡も

出かせぎ対策

出かせぎを「健康で安全に」の願いもむなく、本村出かせぎ者の死亡や傷病事故が相次ぎ、まさに非常事態の感を強くしています。村ではこうした事態を重視、悲しい事故を繰り返さないために、安全就労と健康管理に対する出かせぎ者の心がまえを一層強めてもらうことを願い、いくつかの事例を紹介した出かせぎ特集号を発行しました。

毎年のこと、も家庭生活上に色々な形の犠牲が強いられる、つらく耐え難い期間です。

二月の声を聞く頃には、子供たちの表情もどことなく暗く沈んで見え、寂しさに耐えるだけの精いっぱい、ほほえましい家庭の面影がうすれて行くようにさえ見受けられます。

あり、責務であるといえそうです。すでにお知らせしてあるとおり、本年度の本村の出かせぎ者は千二百人を超えるものと推定されています。

村では、家庭生活の犠牲をできるだけ軽減するため、最も容易にできることとして、留守家族と十分連絡をとることにほか、健康管理と安全就労の二点に照準をあて、行政上の出かせぎ対策をすすめています。

ところが、残念なことに、すでに出かせぎ先での死亡二件、全治三カ月以上の労災事故二件が発生、全体的にも類似事故が連続し留守家族に大きな衝撃を与えております。

また、聞くところによれば出かせぎ就労中の無理や過労が原因で、帰郷後に発病するケースが増えているともいわれます。

これら、変則生活に輪をかけてかねない出かせぎ先での事故や病気を未然に防止するた

め、ここへ上げたいくつかの例を参考に、健康管理や安全就労にいま一度心を配っていただきたいものです。

アッ！という一瞬に ＝全治6カ月の重傷＝

【事例一】

浜松市の自動車部品製造工場で季節工として就労中の山崎部落小松二郎さん(46歳)は、旋盤による部品加工の作業中、作業機の端が巻き込まれたのが原因で右腕骨骨折等で全治六カ月の

肉親愛痛いほど：

郷里の留守宅は、九月に誕生したばかりの初孫を中心に両親、妻、娘さんがひっそりとして入院中の小松さんを気づかっています。

六カ月という大ケガをしながらも「心配するから家族には知らせないでくれ」と語ったという小松さん、事故発生から二日後に秋田市に住む親類からの知らせで「気が動揺した」という家族、その双方の言葉から、出かせぎ者と留守家族の肉親愛が痛いほど感じられます。

父親の小松治郎さんは「せめて一日も早く全快してほしいものです。」

て口だけでもよい。一家の柱として農繁期には采配をふるえるほどに回復して欲しい」と、しんみり語っています。

事故の報に、取るものも取りあえず現地にかけてつた妻のイツさんも、詳しい事情がわからぬままに帰郷したため現在、前日に睡眠不足があったのでないか、夜勤が過労でなかったかなど事故につながった要素についてあれこれ思いをめぐらしています。

病床にある小松さんからの音信を気づかって留守宅に立寄った地域出かせぎ相談員の元助役、小松忠亮さんは「最善を尽くしていても運に左右されるときもある。生命に別条がないだけでもよかったと考えないければ」と、最善を尽しながらなお防止できなかった小松さんの不運をなぐさめる一方、「留守家族が気を丈夫に持たなければ」と激励していました。



出かせぎ家族を便んで話し合い。思わず顔がほころぶことも…。玉米で

【事例二】
昨秋、愛知県内のため池改修工事現場へ出かけた石高部落の佐藤清隆さん(42歳)は就労四日目の十一月二十七日に、急に後退したトラックがはじいた鉄管に左足首をうたが急にバック、勢い余って資材の端に触れたため、はずみ

せめてもの救い 適用

四日目に三カ月の大ケガ

した。

ケガの状態を心配しながら妻のヨシ子さんは「事故は、資材置場から鉄管を運搬するためトラックを待っていたときに起きたということ。反対側から来た別のトラックが急バック、勢い余って資材の端に触れたため、はずみ

で直径二〇センチの鉄管が倒れ、足首に当たったもので、避ける間もなかったそうです。と、佐藤さんから聞いた事故当時の状況を語っています。

佐藤さんは「働きに行くのだから身体が一番だ。慣れたところだし、酒も飲まないから心配はいらない」と言い残し、数年来就労している現場へ出かけたということ。

一家の柱である佐藤さんが就労開始後わずか数日で病床に伏すことになっただけに、高賃金だけに心をうばわれ

社会保険等の不備な事業所で就労している人も見受けられる中で、しっかりした事業所を選んでいくことはせめてもの救いといえそうです。

細心の注意を払いながらもこうした不運に見舞われることは佐藤さんだけに限ったことではありません。

あなたの就労先には、労災など社会保険が完備されているでしょうか。転ばぬ先のつえ「いま一度確かめ、万一に備え万全の対策をたてておくことがのぞまれます。